

研 究

保護貿易の新理論建設への

マノイレスコの試み

手 塚 壽 郎

時間と空間とのうちに或一定の恒常性を現はすところの社會現象は、理論の助けを俟つてのみ理解せらるゝことが出来る。之に反し偶發的にして特種的な社會事實の理解には理論を缺くことが出来るのである。一般的にして永續的な事實は常に理論を要求して已まない。特種的事實に説明を要求し、一般的事實に理論を要求するのは、恐らくは人の生得的要求であるのかも知れない。

ところで此理論は一般的永續的現象に先つて存在することも可能であり、これと同時に存在することも可能であり、またこれに後れて現はるゝことも可能である。従つて社會事實の進展のうちに理論が演ずる役割は、之を識別するに甚だ困難である。社會事實が理論に及ぼす影響を識別するところが困難であると同様に、理論が社會事實に及ぼす影響も識別するに困難である。そこには理論の影響と事實の影響との相互的影響の交錯があるのみではない。事實が或決定的の過程によりて事實自ら發生してゐると同じく、また理論それ自らの發展を理論が決定してゐる場合もある。

けれども社會事實と理論とは相互に影響を及ぼし合つてゐて、全く孤立してゐるものでないことだけは明である。従つて或範疇の社會現象に就て、それが事實より出て來れるものなるか又は理論より出て來れるものなるかを見極むるは容易ではないが、また之を明白に判断し得る場合もないではない。即ち理論の影響が支配的であつて、社會事實に其色彩が強く印されてゐる場合があり、思想が積極的影響を與ふることなく、社會事實はひとり社會的事實の勢から明かに出てゐる場合もある。我々は此後者の例を保護貿易政策の現象に見ることが出來ると思ふ。社會的事實としての保護貿易政策は現代の經濟現象中に最も顯著でありながら、それには殆んど何らの理論もなく、従つて何らの理論の影響も現はれてゐない。

保護貿易は常に現代の經濟現象中に最も顯著なものゝ一であるのみでなく、永續的常住的にして且つ一般的なる事實である。我々が常に此理論を要求してゐるのは、當然であると云はねばならぬ。保護貿易の反であるところの自由貿易は「理論に於ては正當であるが、實踐に於ては正しくならぬ」とは一般に云はるゝ所であるが、これは驚くべき無稽の言であると言はねばならぬ。苟しくも理論にして、事實を説明し得ることなく正當であり得るものはない。だが事實に於て保護貿易の理論と見らるべきものは、最近に至るまで存在しなかつたと云ふも決して過言ではない。保護貿易主義の權化の如く信ぜられたリストも、其思想の根底に於て、自由貿易主義者であつた。「リストは正面から自由貿易を攻撃したのではない。彼は自由貿易主義の議論を一々駁撃したのではない。彼はまた、自由貿易主義の反對の主義であり、それに對する完全な答辯を成す所の、一般的永久的性質を有するシステムを作りあげなかつた。彼は云はゞ牛を捕ふるに角を以てせざりし者である。彼は保護貿易か自由貿易かの問題の方向を變へて仕舞つた。彼は自由貿易の原理を一般的には眞なりと認めて、自由貿易主義に降服した。彼は一般的理論を建設せずして、例外の理論を建設した。彼は保護貿易のために、多くの條件と制限とを加へられてゐる特種の一時的の職能を乞ひ求めたに過ぎない。而もそれにも況して重大なのは、彼が、保護貿易は犠牲であり、一時的存在なるが故にし

のばねばならぬ必要な苦勞であるとの思想を普及せしめたことである。(註一) パッテンが「此らの總ての議論「保護貿易論」は國民の發展の或時期に於ては、疑も無く大なる力をもつことが出来た。然しそれらは、經濟理論の基礎として役立つには充分でない」と云ひ、(註二) Fabian von Koch が、「實際に於て、自由貿易主義者が説く所の國際貿易理論に對峙し得る眞の保護貿易理論は、今日存在しない」(註三)と云ふ所以はこゝにある。Conrad の如きは、保護貿易主義に何らの理論的基礎のない事實に當面して、全く懷疑的となり、自由貿易乎保護貿易乎の問題を一般的理論的問題に非ずとさへ見るに至つた。曰く、「國民の勞働を保護せんとする傾向も、國際分業を發展せしめようとする傾向も、共に排他獨占の權利を振ふことが出来ない。共に、一般的に妥當する原理として確立し得らるゝものではない。……保護貿易か自由貿易かの問題は、理論の問題に非ずして、實踐の問題である」と。(註四)

(註一) Manolesco, Théorie du protectionisme et de l'échange international, pp. 340-1.

(註二) Patten, Les fondements économiques de la Protection, p. 4.

(註三) Fabian von Koch, On the Theories of Free Trade and Protection, p. 3.

(註四) J. Conrad, Grundriss zum Studium der politischen Oekonomie, Zweiter Teil, p. 347.

これはまことに驚くべき事實である。それにしても世界の各國は何れも Mystification のうちに一

あるのか。または保護貿易主義が正當でありながら、未だに其理論が見出されてゐないのであるか。けれども保護貿易主義が單なる *Mystification* であるには、それは餘りに普遍的な事實である。勿論それが一種の衝動に出づるが如くにも見えないではないが、多くの場合に於ては、それは國家によりて意識的に採用せらるゝものである。それ故に、今日まで殆んど普遍的に行はれつゝある保護主義には、未だに理論的基礎が與へられてゐないと云はねばならぬ。而して保護貿易主義に理論的基礎が與へられてゐない結果として、如何なるときに保護を初め、如何なるときに保護を止むべきかは、全く隨意勝手に決定せられてゐる。リストによれば、産業が幼稚の期を脱したときに、保護は撤去せられなければならぬ。然るに如何なる産業と雖、幼稚の期を過ぎたりと自ら告白するものはないのである。マノイレスコの言を借り來れば、産業は女の如し、常に若からんことを欲してゐる。されば如何なる種類の産業を保護すべきかを判定すべき標準も無ければ、如何なる保護の程度が妥當なりやを判定すべき標準も無い。特種なる人々の利害關係のみが保護せらるゝ産業の種類と時期と程度とを決定してゐるのである。「政府が如何に一般的利益を考へてゐても、また其政治的威力が如何なるものであらうとも、政府は、人民を種々なる意味に動搖せしむる所の特種なる者の利益の壓迫から逃れることが出来ない。政府が關稅問題に就て採るであらう所の行爲の規範は、

此らの構成本力の合成力である。より強い理由によりて、今日まで人々が解してゐた經濟學は、商業政策の方向に殆んど何らの役割も演じてゐなかつたと云ひ得る。不偏不黨の經濟學者は之を認めねばならない。チードは云ふ、關稅率は斷じて經濟學說を應用せるものではない。それらは一般的利益には屢々何らの關係もない所の有力な利益の間の妥協の結果である。他方に於て政治的財政的又は選舉上の理由が關稅率の確立に屢々重要なる役割を演ずることがあると。また獨逸ではヘルフエリツヒが同様の結論を下してゐる。曰く、特種の利益が商業政策の實行上に主要なる役割をつとめた。だから學者や理論家が一般的利益を基礎として立てた理論を、人々が利用した場合があつても、それはたゞ眞の動機を掩蔽するためであつたと。」(註)

(註) L. Dechesne, *Economie mondiale et protectionnisme*, p. 98.

普遍的に行はれながら、かくも何らの理論的基礎のない保護貿易の事實に、動かし難い科學的理論的基礎を與へんとして、ルーマニア商工會議所聯合會々頭 Mihail Manoilescu は、*Théorie du protectionnisme et de l'échange international*, 1929. Paris. を公にした。氏は此書の序文に云ふ、「此著作で私が提案しようとしてゐるのは、一般的性質をもつ所の保護貿易の新理論を建設せんことである。讀者が見らるゝが如く、私の目的は小ではない。私はよくそれを知つてゐる。讀者の前に著

者が謙讓であつた習慣は、今は遠い昔の流行として顧みられなくなつたのは事實である。だが私の今の場合は、此古い習慣と義務に屈服せざるわけには行かないほど、重大なのである。私の此試みは實に大膽を極めてゐる。私は、それがたゞ試みたるの故を以てのみ、讀者の寛恕を乞ふのである。私の試みが大膽であるのは、第一に、私が他の保護貿易理論——此らの理論は、私の見る所では、少くとも現代の保護貿易を説明するものとしては明かに不充分である——に加ふる批判の故である。第二に、それは、私の目的が保護貿易の一般的理論の建設にあるが故である。第三にヂネーヴや其他で流行となつてゐる潮流に逆つて、保護貿易を主張するが故である。」(註)私は、著者の此言を單なる自負心の現はれとのみ見るべきではないと思ふ。否著者の所業は、眞に破天荒なる革命を貿易理論史上に出現せしむるものではないかと思ふ。私はこゝに此所業を讀者に傳へ、私が懐く多少の疑問を陳べて、重要な此新學說に對する讀者の注意を喚起したいと思ふ。

(註) Manolesco, Théorie du protectionisme et de l'échange international, pp. 8-9.

二

マノイレスコは保護貿易の新理論の建設を始むるに先ちて、古典學派の貿易理論に内在的批評と

超越的にして破壊的を批評とを加へる。だが此批評をなす場合にも、また新理論の建設をなす場合にも、流るゝ數箇の根本的な前提がある。私は先づそれらを明にせねばならない。

一、マノイレスコの批評と建設とは、直接的にして現實的な經濟的得失の觀點のみからなされてゐる。自由貿易主義者の主張によれば、關稅によりて國際貿易を妨ぐることなくば、直接的現實的利益が得られる。自由貿易は生産及び分配の最もよき形態を出現せしめ、且つそれは總ての生産物の價格の低下となりて現はれると云ふ。従つて自由貿易主義者は純粹に經濟的なる得失の觀點から、彼らのシステムの利を説くのである。之に反し保護貿易主義者殊にリストが保護貿易主義の利益として擧ぐるは、純粹に經濟的なる要素以外のものが多い。Louise Sumnerの如きは、「經濟的利益のみを以てするときは、保護貿易の運動は、如何にするも、正當であると考へ得られない」(註)とさへ極言する。マノイレスコはかゝる舊套を破りて、自由貿易主義の批評にもまた新理論の建設にも、常に純粹に經濟的なる得失のみを立論の基礎としてゐる。

(註) I. Sumner, Freihandel und Schutzzoll in ihrem Zusammenhang mit Geldtheorie und Währungspolitik, Weltwirtschaftliches

Archiv, Juli 1926.

二、マノイレスコは各國々を一の經濟單位と考へ、國內に於ける富の分配關係を問はない。二つ

の單位と考へられた二つの國の問題として考ふれば、容易に解き得らるべき問題は今日まで、國內の經濟的影響と結び付けられて、徒らに複雑にせられてゐた。例へば保護貿易の得失を論ずるに當りて、關稅が生活費、賃銀等に及ぼす影響を考量するが如きである。これが方法上の誤謬たるは云ふを俟たない。關稅が國內の經濟に及ぼす總ての影響を考ふることなしに、保護貿易の得失を完全に研究し得ないのは云ふまでもないが、一國を一の全體として、其國內の詳細なる影響を考ふることなく、貿易主義の得失を考へ得るものである *Premiere approximation* の方法として、これは承認せられなければならぬ。マノイレスコに於ては、貿易主義の得失は、全體として考へられた一國に現はれ來る所の損失又は利益によりて判定せられる。國內に於ける影響は、之を他の分析に委すのである。

三、國際貿易の問題を取扱ふに當りて、普通に學者は、世界の他の國々から孤立して互に生産物を交換する二國のみを考へる。此假定の下に、學者は只此ら二國の需要供給の相對的大さのみに價格を依存せしめる。此方法が無稽なるべきは勿論である。價格は世界全體に於ける需要供給で定まるのであつて、此ら二國のみの需要供給によりて定まるのではない。だから學者は國際價格の變動を考量するが如くにして、事實に於ては、事實とは關係のない、而して正確にして有用な普遍化を

さへなすを得せしめない特種の場合の或變化を考へてゐるに過ぎない。マノイレスコの方法はこれと全く異なる。Prenière approximation として——これで正確にして且つ廣汎なる結論が得られるのであるが——彼は、一國が世界の他の一切の國と貿易をなす場合を考へる。而して此一國は、自ら生産し、又は輸出し又は輸入する商品に就き、此ら商品の國際價格の形成に著しく影響し得るほど、大でないとは假定せられる。故に此小國の生産及び對外貿易に於て、總ての商品の價格は、商品の生産と移動の如何に拘らず、又豊富なると否とに拘らず、與へられたるときに於ては一定であると考へられる。此假定は抽象的な假定ではない。けだし世界には多數の國々が存在するのである。其中の一國の生産、消費、貿易が國際價值を直ちに支配するが如きは稀であるからである。マノイレスコは此假定から出發して、國際貿易の理論を研究し、貿易政策に關する結論を見出し、後に大なる國又は多數の國を一時に考へるのである。此場合には、此大なる國によりて生ぜしめらるる價格變化を考へねばならない。だが此 *Seconde approximation* は彼の第一次の *approximation* の結論を著しく變化するものではない。

而してマノイレスコの假定に於ては、價格が經濟的得失を測定すべき尺度と考へられてゐる。彼は市場に現はれた欲望、富の分配等より生ずる商品の利用の評價をなさない。彼にとりては價格の

みが、與へられたるときに於ける實在である。此價格の背後にひそむ所の眞の社會的利用の如きは彼が關する所ではない。ピアノが一定の價格をもつときに、此ピアノが如何なる利用をもつかを、彼は問はない。只此一定の價格は、ピアノを生産したる國に、其價格だけの購買力をもたしめると彼は考へる。此購買力は國際市場に於て生産物の購買をなし得る力であるから、一國に或生産業が與ふる購買力の大小は、此國に對する此産業の經濟的利益の大小を示すものと考へられてゐる。

四、マノイレスコによれば、國際貿易の問題は國內の個人間の問題と異なる。個人は一般に同じ時に於ては一職業しか行ふことが出來ず、此一職業に一定の収入が相應じてゐるのである。此収入によりて個人は商品を購入し、最大の満足を得ようとする。而して此収入は、職業を變ずるに非れば、變化せられ得ない。また個人は、農業に於ける例外を除けば、一般に直接的活動によりては自ら消費する生産物の大多數を生産しない。自らの一定の収入中から貨幣を支出し、必要とする生産物を購ふのである。故に彼にとりての問題はなるべく低廉に生産物を買入れ、一定の収入を以て最大の満足を得ようとするにある。収入を得べき彼の生産的活動と、買手としての働きの間には何らの關係がない。

國際貿易の場合には之と異なる。一國は自らの労働によりて、その欲望の大部分を充足する。生産の

機關の構造を變化するによりて、自らの欲望の大部分を充足することが出來、輸入によりて充すべき欲望の部分を減ずることが出来る。また個人の場合と異り、輸入商品は一定の收入から支拂はれるのではなく、一國が生産する商品によりてのみ支拂はれる。然るに此ら商品は量に於ても、購買力(價格)に於ても種々である。故に輸入が利益であるか否かは、代價として與へらるゝ此ら商品を生産する力と難易の程度に依りて定まつて來る。輸入商品の價格が低廉であると云ふ事實のみが、此輸入が利益であることを證明するものではない。輸入の得失は“Comment on achète”によりてのみ決定せられずして、特に“Comment on se crée la puissance d'acheter.”に依存する。だから問題は個人の場合より遙かに複雑である。個人が生産し又は購入をなす場合には、自ら生産せる財のうち自ら消費する部分と、自らの欲望を充足するための總ての財を購ふに用ひ得べき貨幣收入とは一定である。個人は職業を變化せざる限り、常に同一の生産物を生産し、此生産物のうちの或一定部分しか消費せぬのであるから、右の第一はほゞ一定してゐる。第二は個人の職業より來るもので一定してゐる。職業の變化は商業問題ではない。故に個人に於ける交換問題の二要素は一定してゐる變化するは此一定せる收入を以て得る所の利用の程度である。故に個人に於ける交換問題は、此一定の收入を以て最大の満足を得ようとすることにある。

然るに國にとりては問題は全く異なる。先づ一國が生産する財の自らの消費部分は可變的である。國民の消費が總ての財に就き一定であるとしても、此國民は生産の方向を變化し、今まで消費せる生産物を輸入することが出来る。而して此變化は後に證明するやうに、粗製品より精製品への變化であるとき、著しい變化を交換せらるゝ生産物の量の上に生ぜしめる。故に自ら生産して消費する財の部分は、生産の方向の變化せらるゝとき、消費を變化することなく、著しく變化して來る。次に輸入する商品の代價として支拂はるべき一國の収入も、個人の場合と異り、一定ではない。一般に一國が其輸入する生産物の代價を支拂ふには、自ら生産し輸出する商品を以てするよりほかはないが、此ら生産せらるゝ商品の方向の如何によりて、得らるゝ購買力は著しく相異なる。故に交換の得失を判斷するには、可變的なる二つの項を比較せねばならない。個人が生産物を購ふ場合には、決定せる二つの要素があり、一の未知的要素がある。國民が購入をなす場合には、三つの可變的要素がある。個人に於ては、生産物の買入れは純然たる商業問題である。國民の場合には此問題は純粹なる商業問題ではなくして、同時に生産の問題である。

國際貿易に於ける此生産の問題は、古典學派がなせる自由貿易主義の證明中には、殆んど全く觀過せられてゐる。ひとりミルのみが考慮中に此問題を加へる。ミルは云ふ、「一國が商品を低廉に

得る意味に二つある。一は價値の意味に於てあり、他の一は生産費の意味に於てある」と。

(註一) 價値の意味に於て低廉に得ることは、商品の生産の後に行はるゝ純然たる商業的作用に依りて定まる。即ち價格の低下する程度は國際需要の均等法則に規定せられる。生産費の意味に於て低廉に得ることは、輸入する商品の代價として支拂はるゝに役立つ所の商品の生産活動によりて定めらるゝ。「労働と資本との同一量を以て、より多くの商品を得るとき、一國は、他の意味即ち生産費の意味に於てより低廉に商品を得たのである。此意味に於ての廉價は、異なる原因に、其大部分依存する。即ち一國が其輸入を低廉に得る程度は、其國內産業の一般的生産力と其労働の一般的生産力に比例する。一國の労働は、其全體として、他國の労働より能率がより低い場合がある。……かやうにして最も少い生産費を以て自らの生産を實現する國は、また最小の生産費を以て其輸入を得るものである。」(註二) たゞ不幸にして、ミルが云ふ生産力は絶對的生產力を意味せずして、比較生産力を意味する。貿易國の間に於ける貿易の利益の分配に就てミルがなせる分析も、結局部分的利益の分配の分析に過ぎなかつた理由はこゝにある。マノイレスコの企圖は、ミルが觀過した所の此絶對的生產費要素と量の要素即ち價格とを結合して、貿易の利益の貿易國の間に於ける分配を正當に分析し、保護貿易の新理論の建設を試みんとするにある。だがこの試みをなすに先ちて、マノ

イレスコは、古典派の自由貿易主義に對して内在的並に超越的批評を加へる。私は先づ其内在的批評を明にせねばならない。

(註一) J. S. Mill, Principles, Ashley's Ed., p. 604

(註二) Ibid., pp. 604-5.

三

云ふまでもなく古典派の自由貿易主義はスミス・リカルド・ミルが建設した比較生産費説の基礎の上に立てられてゐる。スミスは國際分業論を提唱し、一國は外國に比較し優れたる生産條件に於て生産し得る物のみを生産し輸出し、劣れる生産條件に於てしか生産し得ない物を輸入すれば、それらの貿易は常に有利であると主張した。リカルドは更に一步を進めて、比較生産費説を提唱し、一國は、外國に比較し生産の絶對的劣性をもつてゐる商品を輸入して利益が得らるゝのみでなく、また生産能率(註)の優れてゐる生産物と雖、それが他の商品よりは生産能率の優れてゐる程度の少い物であれば、此生産物を輸入するのが有利であると主張した。ミルはリカルドの理論を深化し、比較生産費理論によりて國際貿易が行はれ、國際分業が行はるゝ場合に、之によりて生ずる利益は

貿易國間に如何に分配せらるゝかの理論を完成した。従て比較生産費理論を基礎とする古典學派の自由貿易主義は、特にリカルドの比較生産費説を中心に建設せられてゐると見てよいと思ふ。マノイレスコが古典派の自由貿易主義を批評するに當りて、攻撃の鋭鋒を先づリカルドの比較生産費説に向けた理由は、まさしくここにある。マノイレスコは先づリカルドの理論の内在的批評から始める。勿論リカルドの理論を破壊しても、スミスの理論を破壊したことはない。リカルドの理論が妥當であれば、スミスの理論は當然に正しい。生産能率が他國のそれに劣つてゐても、比較的により、少く劣つてゐるときは、此商品を生産するのが、一國に利益なのであるから、スミスの場合即ち生産能率の絶對的に優れたる商品のみを生産し輸出することの有利なるは當然である。だがリカルドの理論の批評が妥當であつても、それはスミスの理論には妥當しない。マノイレスコは、スミスの理論の批評を、後に超越的批判の方法を以てする批判のうちに併せなすのである。

(註) マノイレスコは生産力 Productivitéなる語を、通常用ゐられてゐる意味と、彼の獨特の意味との二様に用ゐてゐる。私は此區別を明にするため、通常の意味の生産力を生産能率と呼ぶこととする。但し比較なる語を付して比較生産力と云ふ場合には普通の用法に従つたこととする。

リカルドは、貿易國の利益を比較生産費理論によりて證明するに當り、二國ポルトガルと英國の

例を採つた。ポルトガルと英國とは共に羅紗及び葡萄酒を生産することが出来るけれども、其らの生産條件は同一でないと考へる。殊に葡萄酒の生産に於ては、ポルトガルの生産條件は英國のそれに著しく優つてゐるとする。今もし此ら二國が孤立して、其間に何らの通商が行はれないとすると、ポルトガルも英國も共に羅紗と葡萄酒の生産をなさねばならぬ。然し兩國間に通商が開かれるとすると、ポルトガルは葡萄酒のみを生産し輸出し、英國は羅紗のみを生産し輸出する。而して此場合に劣れる生産能率しかもつてゐない英國も尙羅紗のみは生産することが出来、且つポルトガルが需要する英國の羅紗 ΔD 量と交換せらるゝポルトガルの葡萄酒の量 ΔC は、二國間の貿易に於ては、此ら二商品の生産に夫々投ぜられた労働量によりては決定せられない。これが、比較生産費理論と古典派に於ける國際貿易の概念の當然の歸結であるのは云ふを俟たない。

數字を以て右の説明を例示する。英國に於て羅紗の ΔD 量を生産するに一〇〇人の労働者を要し、葡萄酒の ΔC 量を生産するに一二〇人の労働者を要とする。またポルトガルにては ΔC 量の羅紗を生産するには九〇人の労働者があれば足り、 ΔD 量の葡萄酒を生産するには八〇人の労働者があれば足るとする。この場合に英國は葡萄酒を生産するは有利でない、 ΔD 量の羅紗を輸出し、葡萄酒を輸入すれば、一〇〇人の労働を以てして ΔC 量の葡萄酒が得られるからである。またポル

トガルも〇〇量の羅紗を自ら生産するは利益ではない。たゞ葡萄酒のみを生産し、英國から輸入する羅紗〇〇量に對し、葡萄酒を以て此支拂ひをなすが利益である。此結果として、英國は一〇〇人の労働者の生産物である羅紗〇〇量を賣り、ポルトガルの八〇人の労働の結果たる葡萄酒〇〇を買ふこととなる。かくの如き交換は一國內には行はれ得ない。一國內では資本と労働とは自由に流動するが故に、商品は、それらが各含む所の労働量の比によりて交換せられる。ひとり國際貿易に於ては、かゝる等價は各國內に於て生産せらるゝ諸商品の間には決して生ずることが出来ない。

右の例から二つの結論が出て來る。

一、一國が二商品を生産するとき、而も此ら二商品共に他國に於てよりより有利に生産し得るとき、もし一商品が他商品よりより有利に生産せらるゝときは、此前者のみを生産し、後者を輸入するのが有利である。

二、一國が二商品を生産し、此ら二商品の何れも外國に於てよりより不利にしか生産し得ない場合に、もし一商品が他商品よりより不利にしか生産し得られない場合には、前者を輸入し、後者のみを生産するのが有利である。

由りてかゝる二國の何れも共に、相互に自由に通商し、國際分業を成立せしむるのが有利であ

る。

マノイレスコは此結論を疑ふのである。マノイレスコによれば、リカルドが與へた例は特種の狭い場合に關するのであるが、リカルドは此例から、此例に含まるゝことの出來ない廣汎な一般的結論を導き出したと云ふ。まことにリカルドの結論は、一國が他國に對し、或一商品の生産に於て優越性をもち、他の商品の生産に於てより大なる優越性をもつとすれば、此國は只後者のみを生産し、前者を輸入するのが有利であると云ふ一般的のものである。だがかゝる一般的なる結論に、論理的に正しく達し得るためには、リカルドの例に含まれた假定が一般的でなければならぬし、また此假定のうちに、此結論の妥當する範圍を狭からしむる特種なる事實があつてはならない。だが不幸にして此條件は充されてゐない。

リカルドの例にして、彼が導き出した結論と同じ程度の一般性をもち得るためには、只次の三つの所與のみを含むべきである。

- 一、ポルトガルは羅紗の生産に於て英國に優る。
- 二、ポルトガルは葡萄酒の生産に於て英國に優る。
- 三、葡萄酒の生産に於けるポルトガルの優越の程度は羅紗に於けるそれより大である。

故にリカルドが例に採る所の絶對的數字は右の三つの要素以外の要素を含んでゐてはならない。換言すれば次の三つの假定をしか數字に表してはならない。

一、ポルトガルが羅紗の生産に於て英國に優る程度は $\times\%$ ($\frac{1}{2}$ 或いは 11%)。即ちポルトガルは英國が使役すると同じ數の勞働者を以て 2% だけより多くの羅紗を生産し得る。

二、ポルトガルが葡萄酒の生産に於て英國に優る程度は $y\%$ ($\frac{1}{3}$ 或は 50%) である。

三、後者の優越の程度即ち $z\%$ は、前者の優越の程度 $x\%$ より大である。

リカルドも此らの條件のみを付して例を示し、正しき推論をなした場合があつた。だがリカルドは一般に此様な條件の下に推論を進むることなく、此假定とは無關係な他の要素を加へて來た。今我々の解説の明快を期せんがために、記號を左の如く定める。

CP をポルトガルの羅紗の生産能率とし

EP を英國の羅紗の生産能率とし

VP をポルトガルの葡萄酒の生産能率とし

VP を英國の葡萄酒の生産能率とする。

而して此らの二商品が交換せられ、同一の交換價值をもてば、夫々の商品の生産能率は、此ら商

品の同一量の價值を生産するために要したる労働者の數に反比例する。然らばリカルドによりて與へられた前提は、

$VP \setminus VA$ ポルトガルに於ける葡萄酒の生産能率は英國に於けるそれよりより大なり。

$DP \setminus DA$ ポルトガルに於ける羅紗の生産能率は英國に於けるそれよりより大なり。

$\frac{VP}{VA} \setminus \frac{DP}{DA}$ ポ國に於ける葡萄酒の比較生産能率は羅紗のそれより大なり。

だけであるわけである。リカルドの一般的結論は、此らの条件のみを基礎として導き出されねばならない。然るにリカルドは具體的數字を以て例を作り説明してゐる間に、恐らく自ら意識することなく、一般的ならざる条件を加へてゐるが如くである。即ちリカルドは右の一般的条件のほかに

$VP \setminus DP \setminus DA \setminus VA$

なる条件を添加してゐる。リカルドは如何にして此系列を条件のうちに加ふるに至つたか。それは彼が例示せる數字其ものからである。リカルドは、同一量の葡萄酒がポルトガルでは八〇人の労働者によりて、英國にては一二〇人の労働者によりて生産せられると假定した。故にリカルドは

$80VP = 120VA$

であると假定してゐる。次に彼は同一量の羅紗がポルトガルでは九〇人の労働者により、英國にて

は一〇〇人の労働者によりて生産せられると假定した。故にリカルドは

$$godp = 100da$$

であると假定してゐる。此假定から

$$vp = 1.50va$$

$$dp = 1.11da$$

と云ふ結果が出て來た。即ちポルトガルに於ては葡萄酒の比較生産力がより大であると云ふ結果が出て來た。然るにリカルドはそれに補充的條件を加へてゐる。なぜなら、リカルドは、一〇〇人の労働者が生産せる英國の羅紗は八〇人のポルトガルの労働者が生産せるポルトガルの葡萄酒と交換せらると、考へてゐるからである。一〇〇人の英國労働者と八〇人のポルトガルの労働者とは等額の交換價値を作り出すこととなり

$$80vp = 100da$$

となる。之を右に掲げた二方程式に結び付けて見ると

$$vp \searrow dp \searrow da \searrow va$$

なる條件が、一般的條件に添加せられたこととなる。リカルドの一般的結論は實は、此添加せられ

た條件が充された特種の場合にしか妥當性をもつてゐない。だがリカルドは之に氣附かなかつた。彼は比較生産能率のみを重要視した結果、他の條件を忘れ、此誤に陥つたのである。リカルドが假定せる三個の條件

一、ポルトガルの羅紗の生産能率は英國の羅紗の生産能率より大である。即ち $p_p > p_a$ である。

二、ポルトガルの葡萄酒の生産能率は英國の葡萄酒の生産能率より大である。即ち $v_p > v_a$ である。

三、ポルトガルに於ける葡萄酒の生産能率の英國に於けるそれに対する優越の程度は、ポルトガルに於ける羅紗の生産能率の英國に於けるそれより大である。即ち $\frac{v_p}{v_a} > \frac{p_p}{p_a}$ である。の下に、絶對的生产能率の點から見ると、此能率の系列の三つの場合が可能である。

$$1. \quad dp > da > vp > va$$

$$\text{又は} \quad dp > vp > da > va$$

此場合にポルトガルと英國とが、如何にして夫々の必要品を得べきかの問題を考へないとすれば(前節参照)、生産能率の最も大なる活動をなすためには、ポルトガルも羅紗のみを生産せねばならぬ。故に此場合には、ポルトガルは葡萄酒のみを、

英國は羅紗のみを生産するのが有利であると云ふリカルドの結論は妥當しない。

2. $vp \searrow dp \searrow da \searrow va$

此場合には生産能率の大なる活動をなさんとすれば、ポルトガルは葡萄酒のみを、英國は羅紗のみを生産せねばならない。リカルドの結論は此場合には妥當する。

3. $vp \searrow va \searrow dp \searrow da$

又は $vp \searrow dp \searrow va \searrow da$

此場合にはポルトガルも英國も共に葡萄酒のみを生産するのが有利である。故にこゝでもまたリカルドの結論は妥當しない。

云ふまでもなく此第三の如き場合は現實には多く現はれ得ないであらう。然しリカルドの結論も限られた妥當範圍しかもたないと云ふことも確かである。要するにリカルドの結論が妥當するためには、一商品の二國に於ける生産能率が、生産能率の系列の兩極端に位し、他の商品の生産能率が此ら極端の生産能率の中間になければならぬ。リカルドの例にありては、葡萄酒の生産に於てポルトガルの生産能率が英國のそれに優る程度は120:80=1.50であり、麻布の生産に於てポルトガルの生産能率が優る程度は100:60=1.67である。けれども葡萄酒の生産能率の優越度50%は羅紗の生産

能率の優越度 20% より大であると云ふだけでは、ポルトガルが葡萄酒のみを、英國が羅紗のみを生産して有利であると云ふには足りない。同じ優越度 50% , 11% に於ても、リカルドの結論が妥当しないような具體的數字を容易に想像することが出来る。例へばポルトガルと英國とに、葡萄酒の生産に就いては夫々八〇人の労働者、一二〇人の労働者と云ふ數字が現はれ、羅紗の生産に就いては夫々六三人の労働者、七〇人の労働者と云ふ數字が現はれてゐるとすると、ポルトガルの英國に對する優越性の程度は $120:80 \parallel 1.50$, $70:63 \parallel 1.11$ である。だが此場合にはリカルドの結論は妥当しない。此場合は生産能率の系列が

$$dp > da > vp > va$$

に相當する場合であつて、ポルトガルと英國とが共に羅紗を生産するのが有利である。

要するにリカルドの結論は、只一つの場合、即ちポルトガルに於ける葡萄酒の比較生産能率の優越性が同時に絶對的に生産能率の優越を伴ひ、且つまた英國に於ける葡萄酒の比較生産能率の劣性が同時に絶對的にも最も劣つた生産能率を示してゐる場合にしか妥當しない。従つてリカルドの思想とは相異して、一國にとり最も有利なる生産が何であるかを決定するものは、比較的生産能率に非ずして、絶對的生產能率なのである。(註)

(註) Manoilesco, Théorie du protectionnisme et de l'échange international, pp. 99—129.

四

マノイレスコの保護貿易理論の建設が、古典學派の自由貿易主義の内在的並びに超越的批評に先たれてゐることは、既に私が云ひしが如くである。私は此内在的批評を明にした。次に其超越的批評を明かにするに先ち、私はマノイレスコに於ける生産力 *Productivité* の概念を明かにせねばならぬ。けだし此概念こそがマノイレスコの超越的批評の基調をなしてゐるからである。

マノイレスコによれば在來の經濟學の大なる誤は労働の性質の重要さを認めなかつたことから起つてゐる。生産の領域に於ては在來の經濟學にありても、それは、労働の熟練不熟練として、重要さが認められてゐなかつたわけではないが、交換の問題特に國際貿易の問題に於ては、労働の性質は殆んど考量のうちに入つてゐなかつたと云ふ。マノイレスコは、此概念を導き入るゝことによつて交換の現象をよく説明することが出来、また今日まで批判を受くる餘地の無かつたと考へらるゝ自由貿易主義の妥當性を疑ひ得ると考へる。

だがマノイレスコの所謂生産力とは何か。それは其本質に於ては毫も複雑な概念ではない。或勞

働力、或資本、或生産部門が、生産物を生産し、之を交換市場に於て販賣して得らるゝ價額中の此らの働力・資本・生産部門に歸すべき部分を實現し得る力の程度、これが此らの働力・資本・生産部門の夫々の生産力なのである。然したとへば或生産部門の生産力を如何にして評價するか。マノイレスコは生産せられたる純價額即ち總價額から此生産部門に先在せる價額の一切を控除せる額を此生産部門の生産額とし、此額の生産部門の或單位に對する割合を其生産力と見てゐる。こゝで總價額とは、市場價格から生ずる價額を意味しない。當面の問題は國際貿易に關するのであるから、それは市場價格から生ずる價額から、關稅を控除せる價額、又は關稅の存在によりて騰貴せる價格部分を控除せる價額である。また此計算に當りて先在せる價額として控除せらるべきものは次の如くである。

一、原料の價額

二、燃料

三、消耗する機具機械

四、工場労働者以外の労働者がなす用役の價額及び諸經費

五、工場及び機械の減價償却費

此らを控除せる残額は労働者其他の従業員の賃銀、利潤、資本の利子、借入金利子等であり、それが此一生部門の生産額である。

マノイレスコに従へば、此純生産額こそは此生産部門によりて實現せらる國民の利益を示すものであると云ふ。國民が或生産によりて引出し得る利益は、之によりて得らるゝ純價額が大であればあるほど大である。従つて國民の利益は生産の條件の如何に依存するのは云ふまでもないが、然しこれが國民的利益の決定的要因ではない。生産部門の種類こそ此決定的要因である。従つて總生産額は或程度まで利潤とは獨立である。利潤の存在は生産の運用に缺くことは出来ないが、此れが存在せずとするも、多大の國民的利益は存在し得る。國內に於て或生産部門の生産物の生産費が外國の同じ生産物の生産費より大なる場合に、之を國內に於て生産するも國民的利益が存在せぬとは云ひ得ない。利潤は表面的な現象であり、國民的利益の小なる部分に過ぎない。

マノイレスコが意味する所の生産力の概念はかゝる簡單なものである。だが生産力の程度を示すために生産額を結び付けねばならぬ基本的單位を如何に考ふべきであるか。マノイレスコは、如何なる生産も労働と資本との結合なくしては行はれ難いものであるから、生産力の程度は純生産額を労働量と資本量とに結び付ければよいと云ふ。資本と労働のほか、如何なる生産にも共通な要素は

あり得ない。そこで生産力を計算するには、純生産額と労働者数との割合、及び純生産額と用ひられたる資本の割合とを計算せねばならぬ。ところで生産する者も消費する者も共に人であつて、人こそ經濟學的研究の最後の對象であるから、純生産額と労働者数との割合が最も重要である。生産者一人當りの生産力が大であれば、消費者一人當の消費價值も大であるわけで、それが人間社會の繁榮の最も現實的な具體的な象徴である。

そはとに角、Pを一生産部門の生産業の年純生産額とし、Tをこれが生産に従事せる總ての労働者（技師・資本家・企業者をも含ましめて）の數とすれば、此ら労働者の平均生産力は $\frac{P}{T}$ を以て表さる。またCを此生産業に投ぜられたる資本の量とすれば、此生産業に於ける資本の平均生産力は $\frac{P}{C}$ によりて表される。而して労働の生産力と資本の生産力とを綜合し、次の方程式によつて其らの平均を見出せば、此生産部門の生産力が得られる。

$$q = \sqrt{\frac{P}{T} \frac{P}{C}} = \sqrt{\frac{P}{TC}}$$

マノイレスコは之を此生産業の *efficacit * の係數又は性質の係數 *coefficient de qualite d' une industrie* と名けてゐる。私は之を生産力の係數と譯して置く。而して此生産力の係數の系列を作ることによつて、同一の純生産額を最も少い資本と労働とを以て作り出すには、如何なる生産業に此らの

資本と労働とを投すべきかを、我々は知ることが出来る。マノイレスコは北米合衆國、ルーマニア和蘭等數箇國に就て各生産部門に於ける労働者一人當りに就ての生産力の系列を例示してゐる。こゝには只此概念を明かにするためにのみ、北米合衆國を掲げて置く。（註）

北米合衆國の産業に於て労働者一人當りの生産力（弗にて表す）

化學工業	三、四三〇 ^弗
食料品工業	二、〇〇〇
製紙工業	一、九四〇
ゴム工業	一、八五〇
煙草工業	一、五九〇
造船及び車輛	一、五九〇
金屬工業（鐵及び鋼工業を除く）	一、五二〇
機械工業	一、四八五
寫真機萬年筆工業	一、四五五
樂器	一、四四〇

あり、上部は比較的に小である。而して此生産力の分布即ちピラミッドの構成の差は、其綜合的表現を、生産者の生産力の平均に現すのである。(註)即ち農業國の平均生産力は工業國の生産力に比し著しく小である。

(註) Manolesco, op. cit., p. 54

また一國內に於ては農業に於ける生産者の平均生産力は工業に於ける生産者の生産力より遙かに小である。尤もマノイレスコは此ら二大別産業の夫々の平均生産力の比較は統計の缺除せるため、不可能であることを認めてゐる。只彼は農業又は工業によりて生活する者の純生産額を比較してゐるに止るけれども、これらは農工業の生産力の程度を彷彿たらしめ得ないほどのものでもない。彼は Woytinsky の研究を引用して、一八九七年のロシアに於て農業によりて生活する者の純生産額は一人當り五・五磅にして、工業によりて生活する者のそれは二一・五磅即ち前者の四倍であると云つてゐる。同じ年英國に於て農業により生活する者の純収入は六五磅、工業により生活する者のそれは一〇二磅であつて、一・五七倍に當る。またマノイレスコは、世界の主要國廿三箇國の純生産額合計と農業及び其他の職業との關係を一八九六年の Woytinsky の計算を基礎として計算し、純生産額の二〇パーセントが總人口の五二パーセントを占むる農業生産者によりて作り出され、純生

産額の八〇パーセントが人口の四八パーセントしかない他の人々によりて作り出さるゝを認め、農業外の人類の経済活動の生産力は農業の生産力の約四・三五倍であると計算してゐる。(註)

(註) Manoliesco, op. cit., p. 61.

更にまたマノイレスコは世界の主要國をとりて、農業の生産力と各種の工業生産部門の生産力が各國により如何なる程度に相異なるやを研究し、工業の生産力の差は農業のそれより遙かに小であることを確めてゐる。これも當然であると云はねばならぬ。近代の工業に於ては、生産設備や技術は殆んど同一であつて、従つて其生産力は國の進歩の程度には左程依存しない。之に反し農業は文明の程度を反影し、文明國と後進國との間に生産力の差が著しい。(註)そこで他面から考へると、文明の進歩は各生産費門の生産力の差を少からしむるものである。

(註) Manoliesco, op. cit., p. 65.

次にマノイレスコは簡単に、農業又は工業に投下せられた資本の生産力を比較してゐるが、それによると北米合衆國に於て投下資本一〇〇〇弗に就き、純生産額は左の如き額を示してゐる。

年	農業	工業
一九〇九—一〇	一五〇弗	二一〇弗

一九一九—二〇

四六〇弗

五六〇弗

故に一九〇九年—一〇年に於ける工業資本の生産力は農業資本の生産力の約四倍に當つてゐる。一般に同一額の總生産額を作るに、農業は工業に比較し遙かに多くの資本を必要とするのである。

(註)

(註) Manoilesco, op.cit., p. 67.

五

マノイレスコは、私が右に明にせる生産力の概念を提げて、古典派の自由貿易論の超越的批評へと進むのである。彼は此批評の的確を期せんがため、繰り返してリカルドの例を述べる。私もまた彼の批評の解説に忠實ならんがために、リカルドの例を再び繰り返す。

ポーランドは一箇年八〇人の労働者にてA量の葡萄酒を生産し、英國は同じ量の葡萄酒を生産するに一二〇人の労働者を要する。またポーランドは一箇年九〇人の労働者を以て羅紗B量を生産し、英國は同一量の羅紗を生産するに一〇〇人の労働者を要する。これのみがリカルドの理論の唯一の所與である。それは、分析すると、三つの要素を含んでゐる。

- 一、葡萄酒の生産能率に於て、ポルトガルは英國に優れてゐる。(120:80=1.50 ∴ 50%)
- 二、羅紗の生産能率に於てもポルトガルは英國に優る。(100:90=1.11 ∴ 50%)
- 三、ポルトガルは英國に比較せらるゝとき、葡萄酒の生産に於て羅紗の生産に於てよりより大なる生産能率をもつ。(50%:11%)

此所與のうちにあるには、リカルドによれば、ポルトガルは只葡萄酒のみを生産し、英國は羅紗のみを生産し、兩國は夫々の生産物を交換すれば、共に利益を受ける。なぜなら各國は何れも孤立せる場合と同一量の労働によりて孤立して直接に二つの商品を生産するよりより多くの羅紗と葡萄酒とが得られるから。リカルドによれば國內に於ては總ての生産物はそれに投下せられたる労働量の比によりて交換せられるのであるから、英國に於ては一二〇人の労働によりて生産せられたる葡萄酒は $\frac{120}{100}$ の羅紗と交換せられてゐる。そこでポルトガルは八〇人の労働によりて生産せる葡萄酒を英國に輸出して $\frac{120}{100}$ の羅紗を得ることが出来る。然るにポルトガル國內に於ては八〇人の労働によりて生産せらるゝ葡萄酒は $\frac{80}{90}$ の羅紗と交換せられるのであるから、八〇人の労働によりて $\frac{80}{90}$ の羅紗しか得られない。ポルトガルにとりては、孤立して二商品を生産した場合と葡萄酒のみを生産して貿易をなした場合の生産の比は $\frac{120}{190} \cdot \frac{80}{90} \parallel 1.35$ である。これは要するに $\frac{120}{80} \cdot \frac{100}{90} \parallel 1.50:1.11$

1.35を示してゐるのである。此生産能率の比を比較的優越性の程度と云ふ。

そこでリカルドの結論は次の如くなる。

一、一國が他國に對し、或生産物に就き其生産能率に於て優り、また或他の生産物に就きより多く優るときは、此國は後者のみを生産し、前者を輸入するのが有利である。

二、此國が貿易によりて實現する利益即ち受くる所の餘分の生産物は、輸入商品の自國に於ける生産力に對する輸出商品の生産能率の比較的優越性の程度に等しい。

轉じて英國を見る。何故に英國は羅紗のみを生産し、輸出し、之と交換に葡萄酒を輸入するを利益とするか。之によりて同一の生産力を以て直接二商品を生産するより、多くの葡萄酒が得られるからである。リカルドによれば、國內に於ては生産物は投下労働の比によりて交換せらるゝが故に、ポルトガルにては九〇人の労働を含む羅紗は $\frac{80}{100}$ の葡萄酒と交換せられる。そこで英國は一〇〇人の労働によりて羅紗を生産し、輸出すれば、 $\frac{80}{100}$ の葡萄酒を得ることが出来る。もし英國が葡萄酒をも生産するとすると、一〇〇人の労働によりて作らるゝ羅紗は $\frac{100}{120}$ の葡萄酒としか交換せられない。然るに國際分業と貿易により、英國は一〇〇人の労働により $\frac{80}{100}$ の葡萄酒が得られる。直接に二商品を生産するときと貿易をなす場合の生産能率の比は $\frac{80}{100} : \frac{100}{120} = 1.35$ である。英國は貿易

によりて35%の餘分の葡萄酒を受けることが出来る。此餘分の利益を示す比1.35の構成は

$$\frac{90}{100} : \frac{100}{120} = 0.90 : 0.67 = 1.35$$

である。生産能率の劣つてゐる比0.90:0.67は英國の比較的 *inferiorité* の程度と名けられる。そこでリカルドは結論する。

一國が他國に對し、或財の生産能率に於て劣り、他の財の生産能率に於てより多く劣るときは、此國は前者のみを生産し、之と交換に後者を輸入するを利益とする。此利益は比較的 *inferiorité* の程度に等しい。

かくてリカルドの證明によると、國際分業を成立せしめて貿易をなす國は、共に生産能率を利益することが出来る。だが此證明は、一國內にありては生産物は投下労働量の比によりて交換せられると云ふ前提の上に立つてゐる。此前提にして妥當しないとすると、リカルドの證明は其根底から破壊せられる。ところで不幸にも此前提は妥當性をもつてゐない。現實に於ては労働の質及び生産の他の要素殊に生産のために投ぜられた資本が労働の生産能率に影響を及ぼして、一單位の労働によりて作らるゝ商品の交換價値は商品の種類によりて著しく相異せらるゝものとなつてゐる。商品は一國內に於ても、それらが含む所の労働量によつて交換せらるゝに非ずして、労働量と此労働の生

産力によつて交換せらるゝものである。今二商品ありとし、夫々の商品に含まるゝ労働量を $Q \cdot q$ とし、夫々の労働の生産力が $P \cdot p$ であるとし、且つ此ら二商品が同一交換価値をもつものとする

$$QP = qp$$

である。即ち不熟練労働の一〇〇人の労働者の労働の生産物は、熟練労働の労働者の五〇人、又は二五人、又は一〇人、更に進んでは五人の労働者の生産物と交換せられ得るのである。だから右に引用した例に現はれたリカルドの誤謬は、一國內に於ては葡萄酒と羅紗との交換は等量の交換として現はれると考へた點にある。

今ポルトガルに於て羅紗の生産力が葡萄酒の生産力の二倍であつて、羅紗の生産に従事せる一人の労働は葡萄酒の生産に従事せる二人の労働と交換せられるとする。此場合には葡萄酒の Q 量は英國に於ては羅紗 $\frac{120}{100} Qd$ 量と交換せられるのではない。それは

$$\frac{1}{2} \times \frac{120}{100} Qd$$

量と交換せられる。だから結局ポルトガルにとりては、貿易によりての間接的生産と自國にての直接生産との比は

$$\frac{1}{2} \frac{120}{100} \times \frac{80}{90} = \frac{1}{2} \times \frac{120}{80} \cdot \frac{100}{90} = \frac{1}{2} (1.50 : 1.11) = \frac{1}{2} \times 1.35 = 0.675$$

となる。故にポルトガルは葡萄酒のみを生産して、之と交換に羅紗を輸入すれば、同一の労働量を投じて自ら羅紗を生産する場合に比し、此三三・五バーセントの羅紗の量を失ふこととなる。此結果はリカルドが考へたものとは全く異つたものとなつてゐる。リカルドが證明した利益は、實は損失となつてゐる。ポルトガルは、葡萄酒の生産力が小であれば、羅紗の生産を廢しないのが有利である。

更にまた英國の地位を考へてもリカルドの證明とは異つた證明が與へられねばならぬ。今英國に於て羅紗の生産力が葡萄酒の生産力の二倍であるとする、羅紗の〇₂量は、ポルトガルにては $\frac{90}{80}$ 量の葡萄酒とは交換せられずして、 $2 \times \frac{90}{80}$ 量の葡萄酒と交換せられる。由りて英國が自ら直接に葡萄酒を生産すると、自ら羅紗のみを生産して、之と交換に葡萄酒を受くるときと、其ら生産能率の比は

$$2 \times \frac{90}{80} : \frac{100}{120} = 2 \times \frac{120}{80} : \frac{100}{90} = 2 (1.50 : 1.11) = 2 \times 1.35 = 2.70$$

となる。故に英國は羅紗のみを生産し、之と交換に葡萄酒を得ることによりて、一七〇バーセントだけより多くの葡萄酒を得ることが出来る。此結果はリカルドが考へたより遙かに大なる葡萄酒の

量である。英國は羅紗のみを生産し、之と交換に葡萄酒を輸入するのが甚だ有利である。

リカルドの理論によれば、國際分業と貿易によりて兩國共に利益を受けることが出来るわけなのであるが、マノイレスコの理論によれば、生産力の小なる生産物を生産する國は、リカルドの所謂比較生産能率(力)の大なる商品を生産し輸出しても損失を蒙らねばならないし、またリカルドの所謂比較生産能率の共に劣たる商品のうちより多く劣れる商品を生産する國も之を輸出して莫大の利益を得ることが出来る。だからリカルドの所謂比較生産能率の優劣は、貿易によりて生ずる利益の決定的指標ではないし、また貿易によりて二國の利益が共に増大するものでは無くして、反對にそれによりて二國の利益は互に衝突するものである。(註)

(註) Manoiiesco, op. cit., p. 141.

右に述べ來りたる叙述に對し、私は今、マノイレスコに倣ひて、一般的表現を與へ、一般的理論を組み立て、見よう。

農業國と工業國あり、前者をA國とし、後者をI國とする。A國は或農業生産物のみを、I國は或工業生産物のみを生産する。而して此農業生産物のQ量がA國にては一〇〇人の労働により生産せられ、I國にては1000人の労働によりて生産せられるとする。qを此生産物の二國に於ける生

産能率の大小を示す比であるとする。もし $\frac{100}{100}$ ならば、リカルドの假定に於けるが如くA國の産能率が大きである。 $\frac{100}{80}$ ならばA國の産能率が小である。また工業生産物OがA國にては100人の労働によりて生産せられ、I國にては100人の労働によりて生産せられるとする。 $\frac{100}{100}$ ならば、A國の産能率は大きであり、 $\frac{100}{80}$ ならば、A國の産能率は小である。またもし農業生産物の比較産能率が工業生産物のそれより大であるとする。 $\frac{100}{100}$ である。 $\frac{100}{100}$ であるとする。A國は農業生産物の産能率に於ても、また工業生産物の産能率に於てもI國に優り、特に農業生産物に於て比較産能率が大きである。

問題は、此農業國Aが農業生産物のみを生産し輸出して、之と交換に工業生産物を輸入するのが有利であるか、又は工業生産物をも自ら生産するのが有利であるかにある。

Kは工業國Iに於ける工業生産物と農業生産物の生産力の比であるとする。A國は100人の労働を以て農業生産物Q量を生産し、I國に輸出し、工業生産物を受ける。I國にては農業生産物と工業生産物との交換は、此ら生産物に含まる、労働量と生産力の基調の上に行はれる。即ち各工業労働者は農業労働者K人と計算し交換せられ、従つて工業労働者100人の労働は農業労働者100人の労働と交換せられる。故に農業生産物のQ量(I國にては100の農業労働者によりて生

産せられる）は工業國の工業生産物 $\frac{1}{K} \cdot \frac{p}{q}$ $\frac{1}{I}$ と交換せられる。A國は一〇〇人の労働と貿易によりて、工業生産物 $\frac{1}{K} \cdot \frac{p}{q}$ $\frac{1}{I}$ を得られる。A國自ら此工業生産物を生産すれば、一〇〇人の労働によりて此生産物の $\frac{1}{I}$ 量が得られる。故に同一量の労働を費しながら國際貿易によると、内國に於て直接に工業生産物を生産するとの生産能率の比は $\frac{1}{K} \cdot \frac{p}{q}$ である。もし此比が I より大ならば、即ち $\frac{1}{K} \cdot \frac{p}{q} \sqrt{I}$ 即ち $\frac{1}{K} \cdot \frac{p}{q} \sqrt{K}$ ならば、國際分業と貿易とは直接生産に優るのである。

ところで $\frac{1}{I}$ は比較生産能率を示すものであり、 K はI國に於ける工業生産物と農業生産物の生産力の比を示す。故に農業國にとり、工業品の輸入が其國內生産よりより有利であるためには

農業の比較優越度

工業の生産力の農業生産力に對する優越度

\sqrt{I}

でなければならぬ。即ち輸出せらるゝ農業生産物の生産に於ける比較的優越性が、輸入せらるゝ生産物の生産力が此農業生産物の生産力に優る程度よりより大でなければならぬ。マノイレスコは之を一般的なる方式に化して、次の如くに云ひ表してゐる。

「或一國が他國に對し、或商品の生産に就き生産能率の優越性を有し、或他の商品に於てより大なる比較生産能率の優越を有するときは、此國は前者を輸入し、後者を生産し輸出するを有利とす

る。然しこのことが有利であるには、此生産能率の優越性を示す比が、前者の生産力が後者の生産力に優る程度を示す係数より大である場合に限られる。」(註)

(註) Manoilescu, op. cit., p. 147.

此條件を他の表現を以て表せば

$$\begin{aligned}
 & \text{農業の比較生産能率優越性} = \frac{\text{農業の生産能率の優越性}}{\text{工業の生産能率の優越性}} \\
 & \text{工業の生産力の優越性} = \frac{\text{工業の生産力}}{\text{農業の生産力}} \\
 & \text{農業の生産能率の優越性} \searrow \frac{\text{工業の生産力}}{\text{農業の生産力}} \\
 & \text{工業の生産能率の優越性} \searrow \frac{\text{農業の生産力}}{\text{工業の生産力}} \\
 & \text{農業の比較生産能率優越性} \searrow \frac{\text{工業の生産力}}{\text{農業の生産力}}
 \end{aligned}$$

となる。

然るに此條件は充さるゝに甚だ困難であつて、現實に於ては稀にしか充されない。先に例示して置いたやうに工業生産物は常に大なる生産力を示すものであつて、それは農業生産力の二倍、數倍、數十倍に達することもある。反對に農業生産物に於て、一國の生産能率優越性が他國のそれに

二倍、三倍、數倍、數十倍優ることは極めて稀である。同一の價値の農業生産物を生産するに當りて、一國が此生産に要する労働量の二倍、三倍、數十倍を他國が必要とするは寧ろ例外である。従つてもし農業國が右に假定せるが如き地位にありとすれば、國際分業を成立せしめて、工業生産物を輸入して受くるであらう利益は、自ら國內に於て此工業生産物を生産して受くるであらう利益に比し遙かに少い。

翻つて工業國Iを見る。工業國は1000人の労働者を以て工業生産物を生産し、之をA國に輸出し、農業生産物と交換する。農業生産物と工業生産物との交換は、此らの物に含まるゝ労働量と其生産力を基調として行はれる。我々の例にては各工業労働者は、農業労働者 $\frac{1}{2}$ と交換せられるとする。故に一〇〇人の工業労働は $\frac{1}{2}$ 人の農業労働と交換される。そこで工業生産物のQ量（A國にては一〇〇人の労働によりて生産せられる）は、農業生産物 $\frac{1}{2}$ 量と交換せられる。故に工業國Iは1000人の労働を以て、貿易により農業國の農業生産物 $\frac{1}{2}$ を得ることが出来る。もしI國が自ら農業生産物を生産するとすれば、一〇〇人の労働によりてQ量を生産するのであるから、1000人の労働者は $\frac{1}{2}$ 量を生産する。貿易によりて得らるゝ農業生産物の量と直接自ら生産する生産量との比は、 $\frac{1}{2}$ である。もし此比が1より大ならば、貿易は直接生産より有利であ

る。然るに $\frac{P_1}{P_2}$ は常に I より大である。何となれば、これは農業國に於ける農業生産物の比較生産能率優越性 ($\frac{P_1}{P_2} > \frac{P_1'}{P_2'}$) を表してゐるから。また $\frac{P_1}{P_2}$ も常に I より大である。なぜならこれは工業の生産力と農業の生産力の比を表してゐるから。由りて $\frac{P_1}{P_2} > \frac{P_1'}{P_2'}$ は常に I より大である。故に工業國にとりては、國際分業と貿易とは、農業生産物を自ら國內に於て生産するに比べて、常により有利である。

K' 、 K は常に I より大であるけれども、もし $\frac{P_1}{P_2} > \frac{P_1'}{P_2'}$ であり得たとすれば、即ち農業生産物が工業生産物と同一の生産力をもつてゐるとすれば、其場合にのみリカルドの理論は正しい。而して此場合に貿易により農業國が受くる利益は $\frac{P_1}{P_2}$ であり、工業國が受くる利益もまた $\frac{P_1}{P_2}$ である。然るに工業生産物の生産力が農業生産物のそれより大であるとすれば農業國の利益は $\frac{P_1}{P_2}$ となりて次第に減じ $\frac{P_1}{P_2} > \frac{P_1'}{P_2'}$ となれば、直ちに不利益に變化する。工業國の利益はと $\frac{P_1}{P_2}$ なりて益々利益となるものである。且つ $\frac{P_1}{P_2} > \frac{P_1'}{P_2'}$ は通常互に大差のないものであるから、貿易の利益を示す所の $\frac{P_1}{P_2}$ 、 $\frac{P_1'}{P_2'}$ は互に殆んど反比例する。また農業生産物の生産力に對する工業生産物の生産力の優越する程度が増加すれば、貿易によりて農業國が受くる不利益は益々増加し、貿易によりて工業國が受くる利益は、農業國が受くる不利益と同一の割合を以て増加する。即ち農業國の損失を工業國が利するのである。

マノイレスコに従へつゝ私がこゝまで述べて來たのは、農業國が工業國に對し、農業生産物に於ても工業生産物に於ても、共に生産能率が優つてゐる場合である。これこそはリカルド以來考へられて來た *avantage comparatif* のクラシカルな例の場合である。けれども農業國が工業國に對し、農業生産物に就てはより大なる生産能率を有し、工業生産物に就てはより小なる生産能率をもつてゐる場合はクラシカルな例の場合より遙かに興味が多い。此場合は餘り多くの研究の問題とされなかつた。其理由は簡單である。輸入せらるべき生産物の國內の生産能率が他國のそれより大である場合にも、其輸入が國內にて生産をなすに比較して、より有利であることが證明せらるゝとする、輸出商品に就ては生産能率が優り、輸入商品に就ては生産能率が劣れる場合には、貿易によりて此國が受くる利益は證明を要しないと考へられたからである。換言すれば、今私共が問題としようとする場合は、クラシカルな例の證明によりて、既に當然に證明せられたと考へられたのである。

だが古典學派の學者にとりて自明なりし此證明は、マノイレスコにとりては必ずしも自明ではない。なぜなら比較的利益の古典的證明は一般的妥當性をもつてゐないからである。私共は、工業生産物の生産に於て農業國の生産能率が工業國のそれに絶對的に劣つてゐる場合にも、國內に於て工

業生産物を生産するは、農業國にとりて有利に非るか否かを、問はねばならない。

だが此場合にも私共の理論的證明は、既になし來れる證明と全く同一である。げにや貿易によるど國內生産によるとの生産の比は常に $\frac{p_a}{p_b}$ である。相異はたゞ p_a がより小となれる點にある。けだし、農業國の工業生産物の生産能率が工業國のそれに劣つてゐるとすると、農業國は工業生産物の量を生産するために一〇〇人の労働者を要し、工業國はより少數なる n 人の労働者を要するからである。此場合を方式に表せば

$$\frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b}$$

である。故に貿易が國內生産より有利であるためには

$$\frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b}$$

でなければならぬ。然るに $\frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b}$ であるから、 $\frac{p_a}{p_b}$ はクラシカルな例の場合より遙かに大である。故に n がより大であつても、 $\frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b}$ は容易にあり得べく、従つて貿易が利益を齎らし得る機會はより多い。然しまた $\frac{p_a}{p_b} \wedge \frac{p_a}{p_b}$ であることも容易にあり得るのであつて、此場合には直接生産に比較すれば、貿易はより不利益なる結果を齎らす。要するに農業國に於ける工業生産物の國內生産は不利益なる場合もあり得るとともに、また屢々利益なる場合もあり得る。而してこの何れな

るかを定むるに當りて、此國の工業生産物の生産能率が他國のそれに比較してより大であるか否かは、必ずしも決定的事情ではない。寧ろそれは他の重大なる一つの要因即ち此國の農業が工業に對してもつ比較生産力と、工業の生産力が農業の生産力に優る程度との關係に依存する。

私共は私共の證明を、農業生産物と工業生産物とに限つたが、此證明は二商品が如何なるものであらうと、一般的に妥當する。商品の一方を農業生産物となし、他方を工業生産物となしたることは、私共の證明に何らの特種性を與ふるものではない。私共はたゞ私共の抽象的推論に具體的な色彩を與へようとしたに止る。二商品と貿易國二國との性質には、如何なる假定をも與へることが出来るのであつて、之によつて私共の結論は少しの變化も受けない。従つて次の如き假定も考へ得られる。

A國がI國に對し q だけの生産能率優越性をもつ所の農業生産物 O_1 量を生産する代りに、A國が生産する所の生産物の全體(又は平均)はI國の全生産に對し q だけの生産能率の優越性の係數を示してゐるとする。然るときもし $\frac{p_1}{p_2} > \frac{p_1}{p_2}$ ならば、A國にとりては生産物 O_1 の國內生産は、これを輸入するより有利である。換言すればIなる外國と貿易をなすA國に於て、もし生産物 O_1 が生産せらるゝに當りて、國內生産の全體に比較して比較生産能率の優越性を示し、且つ此比較的優

越性が、此生産物の生産力の、國內生産全體の生産力より大なる程度より、小ならば、A國は生産物〇二を國內に於て生産するとき、之を輸入するより、有利である。

マノイレスコは更に此理論をより、現實の場合に近けて來る。既に私が解説したことから明であるやうに、マノイレスコは、貿易國の眞の利益又は犠牲を評價するに、リカルドに従ひ、生産に要したる労働量を指標としたのであるが、今此指標を生産に費さるゝ貨幣金額に求めようとする。一國の利益と犠牲の眞の指標が、結局生産の動因であり消費の動因である人であり、労働であるのは云ふまでもないが、事實に於て此労働量の計算は甚だ困難である。そこでマノイレスコは同一の貨幣量は同一量の労働を表し、又は同一量の満足を表し得るものと假定して見た。此場合にはA國とI國とに於て同一量の貨幣がまた同一量の労働を表すものと假定するのであり、従つてA國のI國に對する一般的優越性又は劣性が無いと假定してゐる譯である。だから $\frac{P_A}{P_I}$ であり、 $\frac{P_A}{P_I}$ は $\frac{P_A}{P_I}$ となる。 $\frac{P_A}{P_I}$ は、A國に生産せられた生産物〇二の價格と他國に生産せられた同じ生産物の價格に對する比を示す。由りて $\frac{P_A}{P_I} > 1$ であるためには、此生産物の國內價格とI國の價格との比が、此財の生産力とA國の平均生産力の比より小でなければならぬ。そして此財の生産力より大であればあるほど、國內價格はI國の價格を越ゆること大であつても、國內生産は有利となるので

ある。

此結論は著しく具體への適用性をもつのであつて、國內價格が外國價格より高い場合にも、如何なる條件があれば、それを國內に生産して有利であるかの具體的問題は此結論に照して答へられることが出来る。マノイレスコはルーマニアの石炭採掘事業をとりて、此結論に具體的例解を與へてゐる。ルーマニアにて外國石炭一車の價格は六、〇〇〇Leiであり國內炭一車は七、五〇〇Leiでなければ供給せられ得ない。ルーマニアの平均生産力は生産者一人に付一箇年三〇、〇〇〇Leiであり、石炭の生産力は生産者一人に付七五、〇〇〇Leiである。此事情の下に於てはルーマニアは石炭を國內にて生産するのが有利である。一〇〇車の石炭七五〇、〇〇〇Leiを國內にて生産するには、生産者一〇人を要する。然るに一〇〇車の石炭を輸入し、平均生産力三〇、〇〇〇Leiを以て生産せらるゝ國內商品を輸出するとすれば、二〇人の労働者を要する。即ち石炭の輸入は、國內にて生産する場合に比較し、二倍の犠牲を要求することとなり、不利である。之を先の方式によりて表せば

$$q1 = \frac{6,000}{7,500} = 0.80 \text{ 石炭に就き、外國に比較せられたるルーマニア國の生産能率の劣性}$$

$$K = \frac{75,000}{30,000} = 2.50 \text{ 石炭の生産力とルーマニアの平均生産力の比}$$

由りて $\frac{1}{0.80} < 2.50$ であるから

$\frac{1}{q_1} \sqrt{K}$ である。

次にマノイレスコは先に述べし結論に歸りて、工業生産物の生産力の係數に就き二三の假定を設け、それらが農業生産物の生産能率の優越性と如何なる關係をもつかを明にする。

先づ $K=2$ 即ち工業生産物の生産力が農業生産物の生産力の二倍であると、農業國に於て工業生産物の國內生産が有利であるためには、農業國は、工業國に對し、工業生産物の生産能率に就き幾何まで劣るも差支なきか、其最高限度を左表にかゝげる。

農業國に於て

工業國に對し、農業生産物の 生産能率の優越の程度	工業國に對し、工業の生 産能率の劣性の最高限度
$q=1.00$	$q_1=0.50$
$q=1.20$	$q_1=0.60$
$q=1.50$	$q_1=0.75$
$q=1.80$	$q_1=0.90$
$q=2$	$q_1=1$

$K=4$ なるよふに

$$q=1 \quad q_1=0.25$$

$$q=1.50 \quad q_1=0.37$$

$$q=2 \quad q_1=0.50$$

$$q=3 \quad q_1=0.75$$

$$q=4 \quad q_1=1$$

これで明であるやうに、純經濟的觀點から見ると、農業生産物の生産は、他國に對し著しい生産能率の優越性をもつにあらざれば有利なものではない。反對に工業生産物の生産は、他國に對し生産能率の優越性を有することなく、否著しく劣性を示してゐる場合にも尙有利である。

以上私は、リカルドの理論の批判を中心として展開せられたマノイレスコの所説を明かにして來た。然しリカルドの理論にも況して著名なる國際貿易理論はミルのそれであつて、マノイレスコも之を觀過してはゐない。ミルによれば、英國にて同一量の労働量により一〇ヤードの羅紗又は一五ヤードの麻布が生産せられ、同じ労働量により獨逸にては一〇ヤードの羅紗と二〇ヤードの麻布が生産せらるゝとすると、英國は只羅紗のみを、獨逸は只麻布のみを生産するのが兩國にとりての利

益であると云ふ。なぜなら英國は一〇ヤードの羅紗を輸出して、一五ヤードの麻布の代りに、二〇ヤードの麻布が得られ、また獨逸は一五ヤードの麻布を輸出して一〇ヤードの羅紗を得られるからである。

だがミルの例は、マノイレスコが既に明かにした場合の一つの場合に過ぎない。従つて私共は之を無條件に承認することが出来ぬ。今先の例を特化し、A國を獨逸とし、I國を英國とし、麻布を農業生産物とし、羅紗を工業生産物とする。A國にて労働者1000人が二〇ヤードの麻布を生産し、I國にて労働者1000人が一五ヤードの麻布を生産するとせば

$$q = \frac{22}{15} \quad q1 = 1.33q1$$

であつて、ミルの例は私共の $\frac{22}{15}$ の場合である。従つて二國間の貿易が有利であるがためには、 $\frac{22}{15}$ でなければならぬ。

またこゝで注意すべきは、ミルが貿易による此三三パーセントの利益を當該國の雙方に配當しようとしてゐることである。此利益は多くの場合に表面的であつて、眞實の利益ではない。けだしミルの利益の測定方法に重大なる缺陷があるからである。ミルは兩國の利益を、生産せらるゝ商品の量を以て測定するのであるが、一國の眞の利益は生産物の量で計算することが出来ない。それは生

産の國民的費用 *Coût national de production* 即ち勞働量によりてのみ計算せられ得るのである。だから羅紗の生産力が麻布の生産力よりより大であるとする、英國に有利なる貿易も、獨逸には不利となり得る。ミルもリカルドと同じやうに、生産力の概念を充分に把握してゐなかつたと、私共は云ふことが出来よう。

五

國際的に對立する所の如何なる國の努力も、生産力の大なる産業への追求に向けられねばならぬことは、既に明かにした二つの證明によつて明白になつた。國民の生産的能力の最も有利なる利用方法は生産力の小なる産業より、其大なる産業への轉向でなければならぬ。それは常に國民の利益を増加し、生産力の小なる産業への轉向は常に國民の損失を招ぐ。故に或一つの新産業を一國內に導き入れんとするに當りて、知らねばならぬのは、其産業の生産力が生産力のピラミットの何處に位するかと云ふことである。もし其生産力が大であれば、國內に於ける其生産は多大の利益を齎らすことが出来る。なぜなら國內に於て此生産が行はれないとすれば、此國は生産力の小なる他の商品を支拂ひて、此商品を購入はねばならないからである。かくて新なる産業を導き入れんとする場合

の問題の核心は、新産業の生産力と、此商品を輸入するとすれば其代價を支拂ふために生産せねばならぬ商品の生産力との何れが大であるかに存する。

だから此問題の解決には、一國の輸出の内容と此國の生産の構成とを知らねばならない。生産力のダイアグラムのうちには、種々なる生産力の産業が現はれてゐる。例へば生産力の極めて小なる産業から、少數の生産者によりて多大なる價值の作らるゝ産業に至るまで、種々なる産業が現はれてゐる。そしてそこに此國の産業の平均生産力が現はれてゐるのは云ふまでもない。

此平均生産力こそは、私共の問題の解決に第一の指示を與ふるものである。げにや或輸入の代價は、一般には、新に生産せらるゝ種類の商品を以て支拂はるゝのではない。それは既に國內に於て生産せられてゐる商品の量を増加して支拂はれる。それは此國に既に存在する生産の範圍のうちにあらねばならぬ。故に代價として提供せらるべき商品が生産力の階梯の極端に置かれないのは確かであり、反對にそれが、生産力の平均の近くに置かるべきは自然である。そこで他國からの輸入を妨げて新に國內に於て生産しようとする商品の生産力が此國の産業の平均生産力よりより大であれば、此商品を輸入せる場合に代價として支拂はるべき商品の生産力よりより大である可能性が大である。従つて此商品の國內生産は此國にとり有利であり、此商品の輸入は此國にとり不利である。

反對に此商品の生産力が此國の平均生産力より小であれば、此商品の輸入が此國に有利であるべき可能性は大である。(註)

(註) Manojlesco, op. 179-184.

然し乍ら平均生産力なる概念は、私共の問題の解決に只一つの指標を與ふるに過ぎない。具體的問題は一層正確な解決を要求する。具體的に或商品を輸入するのが利益であるか、又は之を國內に於て生産するのが利益であるかを判定するには、此商品の生産力が代價として支拂はるゝ具體的商品の生産力より大であるか否かを知らねばならないし、また此商品の生産が具體的に可能であるか否かを考へて見なければならぬ。一般には、生産力の異なる産業は組織と建設とに多大の困難を伴ふものである。従つてかゝる商品は少くとも當初に於ては他國に於てより、劣つた生産條件に於てしか生産せられ得ない。即ち外國に於てより、高い價格に於てしか生産せられ得ない。此場合に自由に放任せらるゝときは、此商品の國內生産は競争のために壓倒せられ、繼續せられ得ないのは明である。けれども此商品の生産が停止せられても、古典派の自由貿易主義者が考ふるやうに、此國の利益とはならない。それが此國の利益となるか否かは、既に明かにしたやうに、この商品の代價として支拂はるゝ商品が、生産力に於てより大であるか否かによりて決せられる。このより大

なる生産力を有する商品が國內に生産せらるゝ生産物のうちに存在せず、又は國內に生産せらるゝ總ての商品が、生産力に於てより小であるとすれば、此商品の國內價格が外國のそれより大であるときも、之を國內に生産するのが有利である。故に國內價格が外國の價格より大なる場合にも、此商品の國內生産を存在せしめ、繼續せしむる保護貿易政策は、古典派の自由貿易主義の主張に反して、此國の現實的利益を齎らすものである。保護貿易主義は明かにこゝに確乎不動の基礎をもつ。同時に保護の程度もまたこゝに其限界の基礎をもつ。國內價格が國外價格より高いと假定し、且つそれにも拘らず國內に於ける此商品の生産力が同じく國內に於ける他の何れの商品の生産力より大であるとせば、國內價格を國外價格と同一ならしむる所の保護は、理論上に於ても實際上に於ても正當である。また此生産力が國內に於ける他の何れの商品の生産力より大であるわけではないが、國內の産業の生産力のピラミッド形のデアグラムの上方に位置を占むるとせば、國內價格を外國價格と同一ならしむる所の保護は、理論上に於ても實際上に於ても正當である。(註一)而してこゝに保護の限界がある。保護の限界は先驗的に與へられない。著しく高い程度の保護が正當である場合もあり、低い程度の保護にて足る場合もある。(註二)

(註一) Manojlesco, op. cit., p. 194.

保護貿易の新理論建設へのマノイレスコの試み

(註1) Ibid., p. 192.

六

先に私は云つた、マノイレスコの新學説は貿易政策の理論史上に破天荒なる革命を出現せしむるものであらうと。また私は云つた。マノイレスコの新學説は古典學派の自由貿易主義を根底から覆し去つたと。かく云ふ私も、マノイレスコが古典派の比較生産費理論の原理其ものをも否定し去つたと云ふのではない。恐らく彼は、古典派の比較生産費理論中に労働資本又は産業の生産力なる概念を導き入れたる以上に、多くを爲してゐないのかも知れない。だが此概念を導き入れたことは、古典派の自由貿易主義を根底から覆したことを意味するのである。労働の質なる概念は、マノイレスコに於けるほど正確な意味に於ては無いが、古典派の理論にも現はれてゐないわけではなかつた。タウシツゲに於ける *Non-competing groups* の如きは、此種の概念の一つの現はれであると思われ得るかも知れない。(註)然し乍らかゝる着想さへも、貿易によりて貿易國が受け又は喪失する利益の判断中には少しも採り入れられてゐなかつた。生産力なる概念のみを導き入れたマノイレスコの理論が革命的なる所以は實にこゝにある。

今の私は、マノイレスコの新理論のうち、大なる論理的缺陷を見出すことが出来ない。私が疑ふのは、たゞ彼の所謂生産力が國民の利益の正確なる指標であるか否かである。マノイレスコの所謂生産力は何らの費用なくして又は同一の費用を以て實現せられ得るものと假定せられてゐる。然し純粹に經濟的觀點のみから見ても、此假定は妥當しない。例へば熟練を要する労働の生産力は、熟練を要せざる労働のそれに比し、より大であらうが、此大なる生産力を實現するには、長い年月を費して此熟練を要する労働を習得せねばならぬ。これがために費さるゝ總ての費用は國民的利益から控除せらるべきではなからうか。疑もなく、習得に困難なる労働は多少獨占的傾向を伴ふが故に、それが、費用以上の獨占的生産力を實現するのが普通であらう。だが労働に伴ふ危険と云ふが如き費用も存在する。マノイレスコは、一九一四年のルーマニアに於ける労働者一人の生産力に就き、

爆發物及び硝酸工業 一、九七〇

ソーダ及び炭酸工業 九四〇

植物性油類工業 九二三

皮革工業	四四〇
綿布製織工業	三一四
毛織物工業	二七八

の例を擧げてゐるが、(註)此ら生産力に労働の危険が影響を與へてゐることは、否定出來ない。此らの事情あるが故に、私は、マノイレスコの所謂生産力なる概念を洗練する必要がありはしないかと思ふ。

(註) Manolesco, op. cit., pp. 44-45.

そして洗練せられた概念である生産力の指標によりて、此大なる産業が保護貿易政策の掩護の下に發展するようになれば、やがて此産業の生産力は低下を示すに至るのである。今工業労働の生産力は農業労働のそれに比較して著しく大であるが、保護貿易政策の下に工業の發達を見るとき、工業生産物の価格は低下し、工業の生産力は低下し、農業の生産力は増大する。そのときには農業の保護貿易政策を行ふべきなのである。これはマノイレスコの理論に於ける矛盾ではない。マノイレスコは保護の指標を、云はば貨幣にて表された純収入に求めてゐるに過ぎない。農業の生産力と工

業の生産力とが接近するとき、保護を要すべき一切のものは失はれる。工業の生産力と農業の生産力の均等化、工業労働の稀少性に因る所の、云はゞ農業労働に比較せられたる工業労働の獨占的地位の破壊、農業國に比較せられたる工業國の獨占的地位の破壊、これこそマノイレスコが人類の經濟生活の理想として追ひ求めつゝあるものなのである。(註)

(註) Manoillesco, op. cit., p. 206.

